

連載小説「女装強要妄想ノート」

1. 雛祭りだからと女装させられる

彼には、誰にも言えない秘密のノートがあった。

勉強机の引き出しの一番下、その奥底にこっそりと置いてある、一冊のノート。

そこに書かれている内容は――

＊

「ただいまー」

「お帰り、真弓。手を洗って鞆を置いたら、和室にいらっしゃい」

「うん」

学校から帰宅してすぐ母親に呼ばれ、佐々木真弓は和室に上がる。

和室というのは1階の隅にある、4・5畳の部屋だ。中央にテーブルと、それを囲むように座布団が4つ置かれていて、小学6年生の妹が座ってスマホを弄っていた。

「ただいま、亜弓」

「おかえり、兄ちゃん」

ここ最近、反抗期気味の妹と挨拶を交わしてから、真弓は改めて和室を見回し――すぐに、今日の日付を思い出した。

「雛飾り、出したんだ。そういえば今日は雛祭りだったね」

「ええ。お母さんが実家から持ってきたものなんだけど、なかなか立派でしょう？」

和室の一角に据えられていたのは、今どきは珍しくなった、本格的な雛飾りである。最上部の金色の屏風の前に、お内裏様とお雛様。赤い毛氈が敷かれた雛段には、三人官女と五人囃子、右近の桜に左近の橘。女の子の誕生を祝い、成長を願う上巳の節句にふさわしい絢爛だ。

「うん。でも、なんで急に？」

「ふふっ、あとで判るわ。亜弓ちゃんは、あんまり興味なさそうだけど」

「あたし、そういう女の子っぽいのは好きじゃないって、ママも知ってるでしょ」

妹の答えは素っ気ない。

陽に焼けた顔は少年のように引き締まっていて、髪も少女らしい艶やかさはあるものの、

ベリーショートに近い短さだ。背丈も6年生になってから急に伸びて、150センチを超えていた。着ているのがガールズの長袖ロングTシャツと、七分丈のデニムパンツでなければ、男の子と思われても不思議ではない。彼女は雛飾りには目もくれず、机に頬杖をついて、しきりにスマホを弄っていた。

「あら残念。じゃあ、お兄ちゃんでお祝いしましょっか？」

「お、オレは男なんだから、そのほうが変だろ」

「いいじゃん、あたしよりお兄ちゃんのほうが可愛いんだから、女の子ってことでお祝いしてもらえば」

「ふふっ、確かにお兄ちゃんのほうが可愛いし、背も低いし、髪も長いし、女の子っぽいつて言ったらそのとおりね」

母親の含み笑いに、真弓は顔を赤くする。

並ぶとよく似た、ふたりの兄妹——どちらもなかなか整った顔立ちではあったが、気の強そうな男前の妹に比べて、兄のほうは柔弱な印象である。しかも母親の言うとおりの真弓のほうが背が低い。高校1年生の男子でありながら、140センチをちょっと超えた程度しかないのだ。髪に至っては、首筋で束ねた髪の毛の房が肩甲骨の間にまで届いている。妹とは逆に、着ているのが高校の男子制服でなかったら、彼のほうが妹に思われてしまいそうなほどだった。

「亜弓——母さんまで……」

妹と母親に冷やかされて、真弓は赤い顔で二人を睨むが——

(母さん、どうしたんだろう。普段はオレのこと、女の子っぽいつて揶揄うことなんてないのに)

(でも、なんだかこの流れ……)

「それでママ、あたしたちを居間に呼んで、何の用なの？ あたし、もう自分の部屋に戻りたいんだけど」

「もう、亜弓ったらせっかちなんだから。じゃあ、これを見してくれる？」

母親は苦笑しながらも、先ほどからテーブルの上に置かれていた紙袋を開けて、中身を取り出した。

それは、ブランド物女児服のコーディネートセットであった。

一枚は、ややクリーム色がかったオフホワイトの、長袖カットソー。タートルネックや袖口の折り返しにはピンクのリボンがついていて、肩の部分はふんわりとしたパフスリーブになっている。胸元にはレースを重ねた、シンプルながらも上品なデザインだ。

もう一枚は、原色に近い赤色のジャンパースカートだった。肩紐の左右やスカートの裾に

フリルがあしらわれ、胸元には白いボンボンがついた蝶結び。レースがついた左右のポケットはハート形になっていて、中央に「A n g e l i c B a b y」のブランドロゴが、白い文字で書かれていた。

さらにそれに合わせるように、白とピンクのボーダーニーソックス。履き口はレースになっている。

(え……？ この、流れって……！)

そのセットアップを見て、真弓の心臓が、大きく跳ねた。

いっぽう、スマホから顔を上げて一瞥した亜弓は、「うげっ」とでも言いたげな表情を隠そうともせず、

「ちょっと、ママ。あたし、可愛いのは好きじゃないって言ったばかりでしょ。いきなり用意されても、ぜったいに着ないんだからね」

「あら残念。こんなに可愛いのに、着てくれないなんて」

母親は小さくため息をつく——が、その声音は、どこかわざとらしい。

そして様子がおかしいのは、母親ではなかった。

話を振られていないはずの真弓が、先ほどからその女兒服を見つめたまま目を丸くして、高鳴る鼓動を必死にこらえているかのように、胸を押さえていたのだ。

(な、なにこれ……既視感——ってというか、オレがいつも、考えていたアレみたいな……)

「うーん——仕方ないわね」

芝居がかった様子で、母親はその服を手にとると、

「じゃあこのお洋服、お兄ちゃんが着てくれない？ 今日は、女の子の節句なんだから」

「な、なんで——！？」

目の前に服を置かれた瞬間、真弓は思わず叫んでいた。

男子高校生でありながら、女兒服を着るように言われたから——では、ない。

(雛祭りだからって、あまりにも雑な口実で女の子の服を着せられる——)

(これって、まるで——)

(まるでオレが妄想して、ノートに書き留めていた女装シチュエーションそのままじゃないか……！)

——佐々木真弓には、誰にも言えない秘密のノートがあった。

勉強机の引き出しの一番下、その奥底にこっそりと置いてある、一冊のノート。

そこに書かれている内容は——どんなシチュエーションで、どんな服を着せられて、どん

な目に遭いたいか、妄想の赴くままに箇条書きで記した、いわば「女装強要妄想ノート」であった。

「学校で女子に言われ、女子制服を着せられる」

「駅に買い物に出かけた時に、女兒服ブランド売り場で見かけた女兒服を着せられる」

「従姉妹からおさがりの女兒服が送られてきて、妹が嫌がったため、オレが着るように言われる」

「男子用の服をすべて処分され、女兒服だけで生活する」

「学校にも女子制服で通学するようになる」

そんな、とりとめもない断片的なシチュエーションを大量に書き留めたものだ。これを見たり、時に書き足したりしながら、夜ごとに女装させられて、たくさんの人に見られたり、連れまわされたりする妄想に耽っていたのである。

そしてそのうちのひとつが――

「雛祭りを口実に、『今日は女の子の節句なんだから』と女の子の服を着せられる」

まさに今の状況と同じだったのである。カギ括弧の中まで、一字一句たがわず。

「う……うん……」

ここまで意味深にお膳立てされては、真っ赤な顔で背いて、その服を受け取るよりほかにない。

(ぼくの手の中に、女の子の、服が――)

(しかも妹がふだん着てる、ユニセックスみたいなんじゃないくて、リボンやフリル、レースのついた、本当の女兒服が――)

(これを、オレが、着る……!)

女兒服を両手に持ったまま、覚悟を決める真弓。

むしろ驚いたのは亜弓で、

「えっ!? 兄ちゃん、マジでそれ着るの?」

「う……うん……あ、歩実が着ないんだったら、母さんが、せっかく買ったの、もったいないし……」

「あっ、ふうーん……」

兄の言い訳に、亜弓は何となく察したように笑って、

「なるほどねー……じゃ、着替えてきなよ」

「うっ……うん……着替えて、来る」

「ふふっ、いってらっしゃい」

「兄ちゃんがどんなに可愛くなるか、楽しみ〜」

母と妹の声援に送り出され、真弓は2階にある自分の部屋へと上がっていった。

＊

「まずは、服を脱がないと——」

ひとまず女兒服はベッドに置き、真弓はTシャツとチノパン、ソックスを脱いで、グレーのトランクス一枚になる。

脱いでも相変わらず、華奢な体である。余計な贅肉もついていない代わり、筋肉もほとんどなく、体毛も薄い。およそ高校生とは思えず、女子小学生と言われてもおかしくないくらいだ。

この体であれば、母親が用意した140サイズの女兒服であっても、余裕をもって着ることができだろう。問題は——

「うう、じっさいに着るとなると、やっぱり恥ずかしい……！」

毎日のように女兒服を着せられることを——それこそいま置かれている状況よりはるかにハードなシチュエーションを考えて妄想に耽っていた真弓だったが、じっさいに目の前に用意されて着るとなると、恥ずかしさは想像以上であった。

柔らかな、オフホワイトのタートルネックカットソー。しっかりとした、赤色のジャンパースカート。レースがついた、白ピンクのボーダー柄ニーソックス。

ベッドに並べた女兒服は、どれもこれも可愛くて、見ているだけでドキドキしてきて——そのせいで、部屋のドアの外に立つ気配には、気づかなかった。

「兄ちゃん、入るねー」

「わっ！？ な、なんだよ、亜弓！？」

とつぜん入ってきた妹を、真弓はじろりと睨む。

「部屋に入るならノックをしてからにしてしろって、いつも——」

「あははっ、パンツ一枚で女兒服を見てる兄ちゃんに言われても、怖くもなんともないねー。それに、せっかくいいものを持ってきたあげたんだから、硬いこと言わないでよ」

「いいもの……？」

「うん。ほら、女の子の服を着るなら、これも必要でしょ？」

そう言って亜弓が投げてよこしたのは——

「し、下着！？ しかもこれ、女の子用の……！」

「うん。あたしがむかし穿いてたやつ。ゴム入りとか、もう子供っぽすぎてあたしは穿かないから、兄ちゃんにあげる」

「自分が穿かないのを、人に押し付けるなよ……っていうか、下着までは——」

「ごまかしてもムダムダ。前にあたしがいない下着を捨てるって言った時に、物欲しそう

な目で見てたくせに」

「き、気づいてたのか……！」

「へへっ、実はあの時はよくわからなかったんだけどね。兄ちゃん、そういう子供っぽいのが好きなんでしょ？」

「ううっ……そうだけど……！」

見透かされている。綿混のインゴムショーツとセットのキャミソールはそれぞれの前側についた小さなリボンと、キャミソールの紐部分が淡いピンクでいかにも女の子らしく、まさに真弓の好みであった。

亜弓はにんまりと笑って、

「あははっ、やっぱりねー！　じゃ、優しい妹を持ったことに感謝しながら穿くといいわ」

「どこが優しいんだよ、どこが……」

「えー？　『あたしの下着をエッチな目で見るとなんて兄ちゃんの変態！　もう一生、口きいてあげない！』なんて言われるより、ずっとマシでしょ？」

「それは……そう、だけど……」

「んっふふー、じゃ、着替えたところを楽しみにしてるね」

兄が口ごもったところで、亜弓は勝負あったとばかりにニンマリ笑って、部屋を出ていった。

「はあ……たしかに、嫌われるよりはマシだけどさ……逆にノリノリなもの、恥ずかしいんだって……」

真弓は溜息をつく、しばしの逡巡ののちに観念して、

「……ええい、もう、どうにでもなれ——」

トランクスを脱いで、女兒用の下着に着替える。

体をびったりと包む、コットンの柔らかな肌触り。キャミソールの紐が、肩に当たる違和感。そしてショーツの、ゴムの締め付け。

どれもこれも、本来なら男子である真弓が味わうことのないもので——

(ううっ、男のオレが、恥ずかしいっ……！　うう、早く、隠したい……！)

(でも隠すためには、これを着るしか——)

ベッドに並べられた女兒服セットアップ。

真弓は覚悟を決めて、まずはタートルネックカットソーから身に着け始めた。

前後を確認して頭からかぶり、両手を出す。首元や袖口の折り返しについたピンクのリボンと、胸元にあしらわれたレースに、

(着心地自体は、タートルネックで変わらないはずなのに……リボンやレースがついてるだけで、すごくドキドキする……！)

(でも本命は、こっちのジャンパースカート……！)

背中のコンシールファスナーを下ろすと、肩の部分をもって広げて見せる。内側にはサテンの裏地がついていて、艶やかな光沢が、まるで真弓を誘っているかのようであった。

「……………」

初めてのスカートに、息を詰める。

そろそろと足を入れると、とたんにサテンの滑らかな肌触りが足を撫でて、背筋を戦慄が這い上がった。

「うっ……！」

足を引きたくなる気持ちをぐっところえ、逆に勇気を振り絞ってスカートの内側へと踏み込む。右足が入ったところで左足も入れ、ゆっくりとジャンパースカートを持ち上げてゆき――

「お、おおっ……！」

己を鼓舞するように雄叫びを上げつつ、真弓はついに、スカートを太ももまで引き上げた。そのまま左右の袖に腕を通し、肩まで引き上げてから、襟足のホックを留める。

「はあっ、はあっ……！」

全力疾走したかのように荒い息をつき、仕上げにかかった。

腰の後ろにある、コンシールファスナーの把手。それをつまんで、ホックまで引き上げる。

ちいつ、と金具が噛み合う音とともに、ジャンパースカートが体に密着してゆく。ヒップ、ウエスト、アンダーバスト、そしてトップバスト――ついに一番上まで到達した瞬間、

「オレ、ジャンパー、スカートを、着ちゃった……！」

達成感と昂揚感、そして禁忌を犯した背徳感に包まれて、真弓は陶然とつぶやいていた。穿き心地に昂奮してもっと確かめたくなり、部屋の中を歩き回ってみたり、裾をつまんでみたりする。

「ううっ、確かにこれ、すうすうする……膝までしかないし、歩くと太ももが当たるし……女の子って、こんな格好で外を歩いてるんだ……」

改めてドキドキする真弓だったが、これで終わりではない。

最後に残っていた、ニーソックスを履く。ただの靴下と言え、白とピンクのボーダー柄にレース付き、とどめに膝を越えるオーバーニータイプだ。女の子用のものであることをこれ以上なく意識させられ、締め付けさえも官能的だった。

「はあっ……これで、よし……でも……」

この部屋には、大きな鏡がない。男物の服の時には、オシャレになどほとんど気を使ってこなかった真弓は、必要性を感じていなかったのだ。

「へ、変じゃないかな……っていうか、変だよね……男子高校生のオレが、女兒服なんか、着ちゃってるんだから……」

着替えは完了したもののいまだ外に出る勇気がなく、入り口のあたりで犬のようにくる

くる回っていると、

「ふふーん、じゃあ、あたしが確かめてあげる！」

快活な声とともに再び扉が開き、またも入ってきたのは妹の亜弓。

彼女はすぐに兄の姿を見つけて目を丸くすると、

「あらお嬢ちゃん、かわいいわねー。ちょっと聞きたいんだけど、この部屋にあたしのお兄ちゃんがいるはずなんだけど、知らないかな？」

「お、オレだよ、オレ！」

「あははっ、冗談冗談。へえー、でも一瞬、『えっなんでこの部屋に女の子が！？　もしかして兄ちゃんが連れ込んだの？　兄ちゃんってロリコン！？』って思っちゃった程度には、似合ってるわよ」

「なんだよ、それ……」

「とにかく変じゃないから、安心して下りてきて大丈夫よ。兄ちゃんなんだから、覚悟を決めなさい」

「この格好で兄なんだからって言われても……あ、ちょっと待って」

ふとノートの所在が気になり、博希はいつもしまっている学習机の一番下の引き出しの底を探る——が、やはりない。

（母さんがここまで開けるってことは考えにくいから、置きっぱなしにしたのを母さんに見つけたのかな……そういえば今朝も思いついて書き込んだ後、登校時間が近くてバタバタしてたし……はあ……）

自分の粗忽を恨みつつ、

（でも……こんな風に着せてもらえるなら、見つかってよかったのかも——）

「さーさー、下に降りて、ママに見せに行くわよ。こんなに可愛くなりましたって」

「う、腕を引っ張るなよ！　っていうか歩実、何でそんなうきうきしてるんだ！？　オレが女の子の格好してるのが、そんな面白いか！？」

「もちろん。これでもう、あたしがママに可愛い服を着せられることもなくなるだろうし、それに——」

「それに？」

「なんだか妹ができたみたいで、嬉しいなって」

「う……」

手を引っ張って廊下へと連れ出しながら言う妹から、真弓は赤い顔を背けるのだった。

＊

結論から言うと、彼の想像したとおりだった。

今度は和室ではなく、ふだん食事している洋室のダイニングテーブルに置かれたキャンパスノートに、

「やっぱりそのノート……！」

「ええ。だめよ、こういうものは、ちゃんとしまっておかなくちゃ。机の上に出しっぱなしだったわ」

「だからって、読まないでくれよ……」

ちょっと恨みがましい目を向ける真弓だったが、母親は平気のへいざで、

「それにしても、ずいぶん可愛くなったわね。どう？ 女の子になった気分は？」

「す——すごい、恥ずかしい……けど、ドキドキして、悪くない気分……」

「ふふっ、よかった。ママがもっとかわいくしてあげるから、こっちにいらっしやい」

「うん……」

素直にダイニングのチェアに座ると、母親は正面に立って、息子の髪を止めているゴムをほどこきブラッシングしはじめた。

「真弓の髪は綺麗で長いから、ブラッシングし甲斐があるわ。こっそりママのシャンプーとかを使ってたおかげかしら？」

「うっ……それも、バレてたの……？」

「もちろん。前から減りが早かったもの。亜弓は使う子じゃないし」

「だって面倒くさいもん。短いほうが乾くの早いし、動きやすいし」

「長いほうが面倒なのよね、髪って。真弓は『切りに行くのが面倒』って言ってたけど、やっぱりそれも、女の子っぽくしたかったから？」

「う……はい……」

ごまかしきれず、真弓は真っ赤な顔で背いた。

母親はくすくす笑って、

「はい、出来上がり。顔は……うん、お化粧しないほうが、それっぽいわね。じゃあ、鏡を見てごらんなさい」

「うん……」

真弓は緊張に喉を鳴らして立ち上がると、リビングの一角に置いてある大きな姿見の前に立ち——ただでさえ大きい目を、いっそう丸くする。

「これ……ほんとに、オレ、なの……？」

女兒用のカットソーと、赤いジャンパースカートを着た自分の姿は、どこからどう見ても女子小学生で、真弓自身でさえ絶句するほどだった。もともととても男子高校生に見えろとはいえず、制服を着ていてさえも妹が兄の制服を着せられているようにしか見えなかったのだ。まして長く伸びた髪を垂らし、綺麗にくしけずった後だと、

「あははっ、ほんとに年下の女の子にしか見えなくなっちゃった。んー、でも、足はもうちょっと閉じたほうが女の子っぽくていいんじゃないかな。爪先を内側に向けて——」

「こ、こう？」

「そうそう、いいわよ、兄ちゃん。くすくすっ、すぐにやってくれるなんて、兄ちゃんほんとに女の子になりたいんだね」

「それは……その、こんな格好してるんだから、逆に女の子っぽくしないとおかしいかなって思って……」

「言い訳するところも可愛いな。じゃあ、そんな格好してるんだから、兄ちゃんじゃなくて『真弓ちゃん』って呼んでもいいよね？」

「えっ……ま、真弓ちゃんって、それは……」

いよいよ妹扱いに、真弓は耳まで真っ赤になる。

母親は兄妹の——いや、姉妹のじゃれ合いを嬉しそうに眺めて、

「ふふっ、ふたりとも楽しそうでよかったわ。じゃあ真弓、とりあえず今日いちにちは、その格好で女の子として過ごしなさい。『雛祭りなんだから』、ね？」

「うっ……は、はい……」

「それと、これからは、ノートはリビングに置いておくから、今後も思いついたら書き足しておいて」

「ええっ！？ こ、ここに置くのは、いくらなんでも恥ずかしすぎるんだけど——」

「その方が便利でしょ？ 母さんや亜弓がそれを読んで、希望通りのシチュエーションで女装させてあげられるんだから」

「うう……自分でお願いするのと大して変わらないし、なにが来るかわからないから余計にドキドキする……」

「ふふっ……そうそう、亜弓も、ノートにあるからって最初からあんまりハードなものにはしないでおくように、ね？」

「はい！ 最初はソフトなのからゆっくりと、ね」

「ええ。わかってくれていてうれしいわ。じゃあ次は——」

妙なところで意気投合しながら、さっそくソファに並んでノートを読み始め、あれやこれや相談しはじめる母と妹に、真弓は溜息をつく。

(まあ、いきなりハードなプレイをされるよりはましだけど……)

ノートを発見され、女装願望を知られて、いったいどんな目に遭わされるのか——今の真弓にはまだ、知る由もないのだった。

(続く)